

1 鶴の巢籠

尺八 琴古流本曲

番(つがい)の鶴が朝焼けの中を飛来し、巢を作り卵を孵し、雛を育て、やがて子別れし、死を迎えるまでが描かれています。鶴の一生を通して大慈大悲を表す曲と言われています。鶴の羽ばたき、鳴き声を様々な技巧を尽くして表しています。コロコロ、カラカラ、玉音などとともに様々なトリルが駆使されています。

2 三谷菅垣

尺八 琴古流本曲

享保十三年(1728)頃、初代黒沢琴古十九歳のとき、長崎の松寿軒にて一計より習ったものと言われています。「リーリーウレー」という旋律を中心にした雪井彌子のリスミカルな曲調で、筆の手をそのまま尺八に移したように感じられます。

3 三谷

尺八 古典本曲

〈三谷〉は、サンスクリットの「サマーディ」が語源ともいわれています。意味は、主体と客体の境界がないこと。日本語では、「定(じょう)」「三昧」がこれに相当します。禪の修業の段階の名称の一つでもあります。

4 れんげ草と寶蜂

尺八 等 宮田耕八郎 作曲

春の田圃にうす紅色の袂巻を敷いたように咲くれんげ草は、子供たちが描んでは花のくびきざりを作り、寶蜂に蜜を与え、やがて肥料になります。寶蜂が一心に蜜を採集する姿は、美しくまたほほえましく、子供たちにとって興味つきない見ものです。

5 初鶯

尺八 等替手 宮城道雄 作曲

宮城道雄が二十歳のときの作品です。鶯の鳴き声のさまざまな描写や鶯の谷渡りを描く部分など、洋楽の標題音楽の性格を取り入れています。等や尺八の技巧が難しいことでも有名です。

6 借別の舞

尺八 宮田耕八郎 作曲

大志をいだいて旅発つ友を送る二人だけの舞です。酒を酌み交し志を語り合い、立って共に舞います。やがて一人が立って白扇をひろげて舞うと、後からいまい一人も立って共に舞います。舞は(六段)やくみだれなどの段物の奏法と新しい奏法とを組み合わせてあり、尺八は古典本曲の奏法を用いています。

7 雲井獅子

尺八 宮田耕八郎 編曲

雲井獅子という本曲は、博多の普化寺一朝軒に伝承していたそうです。古典本曲の中で最もリズムのはっきりした曲で、「ほとんど外曲」などと言われています。

8 新内流し〜滝流し

尺八 野村正峰 編曲

新内節というのは、本来語り物といって、義太夫や常磐津などと同様にある物語に節をつけて唄いながら語るものなのですが、その合の手には演奏される器楽の連れ引きの旋律は、また格別の情緒があり、ある面では爛熟した江戸文化の酒麿の匂いとも感じられます。

〈物遣帳〉は、義経、弁慶主従の逃避行を演ずる歌舞伎の曲として有名ですが、曲中に〈滝流し〉という部分があり、難局ということで昔は秘伝にされていたようです。

9 春の海

尺八 宮城道雄 作曲

勅題「海辺の巖」に因んで作曲されたもので、長閑な春の海の感じ、かもめ飛び交うさまを現した曲です。

10 夕月

尺八 柳内彌風 作曲

日本の情感を糸の線に託した等三絃二重奏。
つるべ落として 暮れてゆく 秋の夕月
見え隠れし 雲間にまごう 弓張

11 明鏡

尺八 岸屋正邦 作曲

明治時代末期以降、「尺八は等系の楽器や奏者と合奏するのが最も相性が良い」と考えられてきました。作曲者はそういう風潮に疑問を感じ、「尺八の本曲、特に古典本曲の演奏に想いを致す時、その間合いや呼吸法には、長唄を含む三味線音楽のそれと極めて相似するものがあり、そこに新しい組合せの可能性を感ずることが出来ます。〈明鏡〉は、作曲者のそのような受けとめ方の適否を具体的に知る絶好の一例として書かれた作品です」と述べています。

先ず、遅い部分のやりとりが始まり、次で軽快な動きから、やや長めのフレーズの交互演奏、転じて急速となり、最後に冒頭と異なる遅い曲調をもって終わります。

1975年作曲